

2008年

2月9日(土)
PM

オープニングトーク

未来につなぐ 地球の魂 ~「みづち」からのメッセージ~

三千年の未来へのメッセージ オペラ みづち

場所

赤城青少年交流の家
講堂

講師：丹治富美子 インタビュアー：岸昌孝 担当実行委員：田中亜樹

MENU あらすじ紹介
朗読 ~第3幕~
インタビュー
高校生による合唱 ~美しきふるさと~
..... インタビュー内容

「みづち」は奥が深い

この環境教育関東ミーティングでは「温故知新」が隠れキーワードになっている。サイエンス(科学的)な要素もたくさんある。様々な環境問題・環境教育の解決のヒントもある。

伝えるカタチ

どうやって人にものを伝えるか...いろいろな表現を使って、人の心を変えたい。歌、アニメ...、いろいろあるが、「みづち」は、世界唯一の環境オペラとして誕生。文科省も絶賛。

「みづち」とは?

想像上の生き物で、頭に角があり、4つの脚で、ヘビのような姿をしており、本来は、人間に悪さをするとされている。

このオペラでは、水の神様として表現した。

「み」「つ」「ち」の意味

み=水、つ=つ(の助詞)、ち=精霊、「みづち」=「水の精霊」

脚本の構想(3つのテーマ)

「宇宙」=星で表現。夕星のエリア。

「自然」=ふるさとで表現。

「愛」=人を慈しむ気持ちを髪で表現。髪を大切に。

そして、旅で場面を展開させる。

地球に巻き付く大蛇

海洋大循環=暖流と寒流の水の流れが、止まってしまう危機。

地球温暖化のことも連想させる。

鳥が好きですか?

鳥と黒姫が重要な役割。鳥は指標生物として扱われている。

問いかけるメッセージ

水の大切さを伝えたい。生命の起源は、海(水)である。

環境のこと、温暖化のこと、様々な地球の異変を。

このオペラを書き始めた1999年頃は、世間はそれほど危機を感じておらず、最近になってようやく...

人間がこの地球上に存在する意味

地球上のすべて生き物の頂点ではない。人間が支配してはならない。「共に生きるべき」と考える。

水のイメージ

雨や雪解け水が地下深くに浸透し長い年月をかけて再び地上にわき出るとするとき...地球が生み出した「地球の魂の雫」と言える。

雨の表現

日本語は大変豊かな言葉。たくさん表現の方法がある。

例えば梅雨(つゆ)。五月雨、梅雨(ばいう)、霪雨(ばいう:かびのあめ)、卯の花腐し(うのはなくたし)、等とも言う。夕立も様々ある。

五感、日本人の繊細な感覚

伏籠(ふせご)=平安時代、衣服に香りをたきしめる道具。あごた香炉の中に、薫き物(たきもの)を入れる。梅花・荷葉(かよう=蓮の葉)、侍従、菊花などがあるが、この会場がこけら落としてである聞いたので、めでたいときに使う「黒方(くろぼう)」を焚いた。

五感の大切さ

文明の発達には、本来持っている感覚を著しく退化させているのではないか? 嗅覚は生命に関わる重要な器官で、胎内にいるときから、死の直前の最後まで残る感覚である。生命には嗅覚が大切なのではないだろうか。

香道の香りの利き方

野花の香りは、そっと両手で花をくるんで、熱が伝わって、手のひらの隙間から香りか。

神様は弱い?なぜ助けることに?

このオペラの中では、少年のように若い小太郎が、苦しい旅の中でいろいろを知っていく。そして黒姫との出会いを経て、少年からたくましい若者に成長する。「知る」というプロセスが必要だった。

かわいい子には旅をさせよ

よその村を見て、自分の村(地域)をバージョンアップさせるために送り出す。

どの世代に思いを伝えたいか?

すべての世代に、地球のことを一緒に考えてほしい。

オペラという形を選んだ

科学者の学説は難しく、多くの人にはなかなか聞いてもらえない。しかし、オペラを使えば、それが可能ではないか。

私は長い間、音楽・文学に関わっていたのでその分野から表現すれば、もっとより深く伝えられる方法を考えられるのではないかと感じた。単一の表現手法では、広がり難しい。いろんな人たちと一緒にやりたい。

丹治先生の生き方は絶滅危惧種のような...

生活の仕方が、現代文明の方向と逆のように見えるからか。毎日必死で生きているが、時間がかつてもゆったりしている。

文明の便利なものを、あえて使わない。自然を感じることを大切にしている。都会に住む人々が、現代文明により、生活の基盤の地球を脅かしている中生き延びるのは、丹治先生であり、絶滅するの都会に住む人々では...

森に住む

自分の身体に正直にいます。

かつては月に何度か森に逃げ込んで心を癒していた。それは、大変心地よかった。ならば、森にいればよい。森に住むことにした。

都会の雑踏の中で、信号待ちしていると涙が流れるようになった。排気ガスなどに敏感になったのか。

長い時間、自然の中で過ごすうちに、身体が欲するもの口にしていければいいのではないかと思うようになった。

紫式部と友達に

一千年前に書かれた源氏物語。紫式部や清少納言が書いたもの読むと、同じ気持ちになり頷ける。一千年も昔から自然の大切さを訴えていたのに...

枕草子には、火鉢に手をかざし手をこするシーンがある。火桶に足をのせるシーンもあるが、私はよくわかる。同感できる。私は火鉢を介して、一千年前の人と話ができるのに、そんな経験のない今の若い人には通じない...。火鉢が必要のない現代、文明の発達のすさまじさを感じる。

三千年のメッセージ

すごいスピードで文明が発達し地球を破壊している。そのことに2000年の私たちが気づき、その速度を少し速度を落とせば、3000年の人々にこの地球を繋げることができるのではないかと...。そんな発想で、このオペラは一千年前を舞台にして組み立てた。

一千年前の紫式部と対話ができ、一千年後の人類にも対話が出来よう...

私たちはどうすればいいのか

文明は人間が生み出した人間の叡智。叡智を絞って、発見・発明を続け、地球をも危うくしているが、それは「人間の叡智」が解決できる。3000年の未来につなげることができるように。

ウサギとカメの競争

ウサギはカメを見ていたが、カメは相手は誰でも良かった(見ていなかった)。カメはゴール(目標)だけを見ていた、ということが重要。

小太郎は最初、どこにいけばいいか分からなかった。鳥をたよりに進むと、答えを持っている人に出会えた。目的・目標が見えてからの小太郎の足取りは速かった。間違えるように成長した。

「みづち」は群馬県生まれ

クワイマックスで「この場所はいったいどこだろう?」となる。そして、「美しきふるさと」の大合唱がある。それは2000年の群馬県であることを、大合唱で表している。

オペラを書くにあたって群馬県中を訪れた。県木のマツを含め、群馬県のことを歌の中にたくさん入れられている。群馬県を「美しきふるさと」として書き上げたが、地名をかえれば、どの地域にもあてはまる。地球の環境を発信する芸術、オペラとして、日本中、世界中に群馬県から伝えていってほしい。

小太郎が生まれる

壇上の若者(みづち合唱)やこの会場の方々に、私の思いを託せることを嬉しく思う。この中からもたくさんさんの「小太郎」が生まれることを心から願っている。

(レポート:Green-net 松井孝夫:尾瀬高校)